
屋上メガネ

由紀琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

屋上メガネ

【Nコード】

N6998X

【作者名】

由紀琳

【あらすじ】

主人公の琥子はある日、胸のあたりにモヤモヤを感じる。それを治そうと屋上に行くところになっていたのは…？
琥子の幼なじみの将斗も転校してきて…！
屋上から始まる琥子の恋物語。

モヤモヤ(前書き)

第1話です！

文章がうまく書けてなくて、読みづらいかもです) ; ; 、汗
すみませんm(_ _)m

モヤモヤ

「麻衣〜!!」

「何〜?」

教室の奥に居た私の親友の麻衣は、

少しイヤそうな顔をして私の元へ寄って来た。

「なんか今日この辺がモヤモヤするから、ちよつと屋上行つてくるね」

そう言つて立ち上がった私の腕を、麻衣は掴んで言った。

「なぜに屋上??」

「外の空気吸つたら治るかな〜と思つて」

私は満面の笑みで言った。

「なんじゃそりゃ!…まあ、いいや。分かった。」

「ありがと!じゃ、行つてくるね」

「はいはい。お大事に〜」

と麻衣は少し小馬鹿にしたように言った。

そして教室をあとにした。

ホントに今日は胸のあたりがモヤモヤする。

…なんだろう?

モヤモヤ(後書き)

琥子は天然？

ここからどうなるんでしょう？..?笑

屋上（前書き）

第2話です！

前の話、短かったですね（ノ、）（ペチ

今回は、もう少し長く書けると思います…（笑）

屋上

私は麻衣と別れた後、校舎の一番上にある屋上を目指した。階段を上り終わり、扉に手をかけた。…なぜかドキドキした。

ギイ……

厚く重い、少しサビがついた扉を開け、コンクリートの床を少し歩くと、そこに誰か居た。

村田泰佑くんだった。

彼とは同じクラスだ。しかも隣の席。なのに一度も話したことがなかった。

彼は、みんなとあまり喋らず、一人でいることが多かった。いつも休み時間になるとどこかへ消えてしまう謎があった。が、今日謎が解けた。ここにいたのかあ。

「村田くん！」

私は村田くんのもとへと駆け寄った。

「…あ、矢崎さん」

私は、村田くんの隣に立った。

「矢崎さんどうしたの？なんかした？」

そう言って困った顔をした。

「うん。なんかね、胸のあたりがモヤモヤするの」

「そうなんだ。早く治るといいね。」

彼はそっけなく言った。…私、邪魔なんだな。でもせつかく二人きりなんだからあきらめないぞ。

「うん。村田くんはどうしたの？」

「俺？…別に。」

「そうなんだ。」

「……………」

「……………」

ヤバイ。会話が途切れた…

どうしよう、なんかないかな…あ！

「そういえば私、村田ちゃんと話したことなかったよね？」

「…そうだね。」

またそっけない…あきらめるか！

「なんで村田くんってみんなと話さないの？」

「…めんどくさい。」

…え？そういうこと？

「そ、そうなんだ…」

そう言っただけの顔を見ると、なんだか寂しそうな顔をしていた。…？

「どしたの？」

「…何が？」

「あ、いやなんか、寂しそうな顔してたから…」

すると彼は目を見開いていた。

…なんか変なこと言っただけかな？

そう思っただけなら、

「あ、ごめん。いきなりこんな顔されたら困るよね…」

「いや、別に大丈夫だよ！…もし良かったら、話聞かせてくれない

かな？」

村田くんは絶対なんかあった。…女の勘がそう言っている。

私が返事を待っていると、

「俺の話…聞いてくれる？」

そう言っただけを見た。

その時の顔が、何かを決意したような、諦めたような顔だった。

この時、もうモヤモヤは消えていた。

屋上（後書き）

丁度いい長さですかね？（*、*）
やっぱり書くの大変ですね。（。、。、。）

村田泰佑 sideー過去ー (前書き)

泰佑くん sideでちやいました (*ノ >*) アチャー

村田泰佑 side 過去1

これは俺が中学時代の話。

小学・中学はどことも混ざらず、そのまま学年が上がるだけだった。なのにも関わらず…俺はいじめられた。

中一 春

「おい、泰佑。お前最近調子乗ってんなあ。」

ソイツは、仲間の二人と顔を見合わせ、ニヤニヤ笑っていた。

「俺なんかした？したなら謝るけど。いつかな…」

「うるせんだよっ！！」

バキッ！！

「ツッ！！…イッテ…」

「ハハハハッ！…静かにしてるよ。ハハハハッ！」

俺は殴られた。かなりショックだった。

なぜなら、仲間だと思っていたから。

俺ら4人は、何をするにも一緒だった。

遊ぶときも、ワルさするときも、登校・下校も…

何もかも一緒だった。仲間だと思っていた。

でも、勘違いだったみたいだ。

なんてバカなんだ、俺は…

中一 夏

まだアイツらからの暴行は続いていた。

でも、こいつらのを我慢してれば良いと思っていたから、頑張っ学校にも行った。

周りの友達も「大丈夫？」って声を掛けてくれた。
だから、頑張れた。

でも、違かった。

いつからか、クラスのみんなからいじめられていた。
なぜだか分からなかった。シヨツクだった。

無視、持ち物を汚す・捨てる、ゴミを投げる…

いじめの典型的なパターンだった。

でも我慢した。頑張って、頑張って、我慢した。

いじめは三年まで続いた。

でも学校は行き続けた。

そして、高校は知らない人しかいない所にし、

もし誰かいてもなるべく分からないように、メガネをかけた。

高校では、友達を作らなかつた。

面倒なことになると嫌だから。

俺は中一の時から、心を閉ざすようになった。

村田泰佑 s i d e ー 過去 ー (後書き)

泰佑くん s i d e 終わりました ー ^ ^

悲しいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6998x/>

屋上メガネ

2011年10月20日08時22分発行